

勝沼城跡 三田氏が200年にわたり拠点とした、一名竜ヶ谷城ともいう、平山城に属する。

八) に没したという。当時の大石氏の支配領域は、南は相模国座間から北は武蔵国所沢周辺にまで及んでいたといわれる。

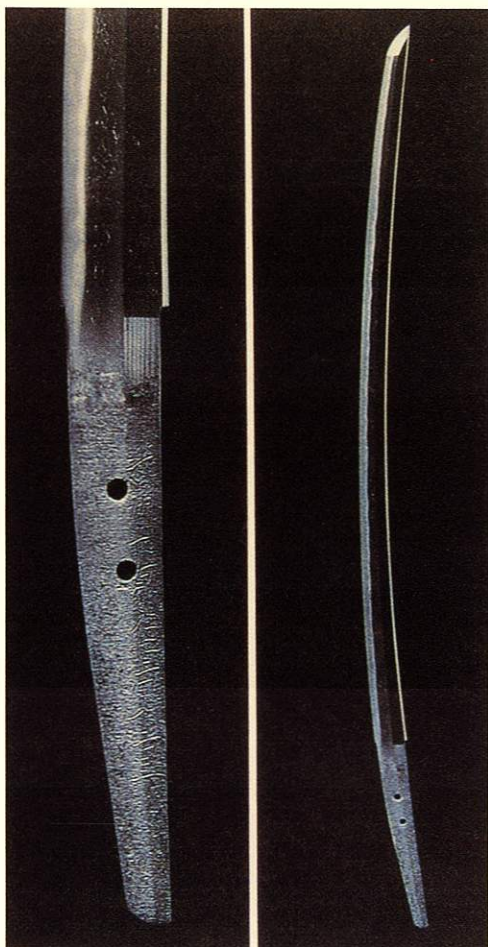
■福生を支配した平山氏

福生周辺の最初の支配者とされる平山氏は、室町時代は船木田莊ふねぎのしょう(八王子市、日野市)の年貢を徴収し、領家りょうけである東福寺におさめる立場にあった。平山氏の居館があり、名字の平山が船木田莊のなかの地名(日野市)としてあるところから、このような立場は、鎌倉時代以来のものであったと考えられている。また足利氏が一四一七年(応永二十四)、平山氏や武州南一揆の諸公事しよこうじを五年間免除したのは、禅秀の乱の功績をたたえたものと思われるから、平山氏も持氏方として戦っていたことが考えられる。

ていった。多摩郡を中心に勢力を伸長させ、大石信重の子憲重の時代には、関東管領就任に圧力をかけるまでに成長した。しかし憲重の子憲儀を最後に、大石氏はふたたび守護代、目代もくだいの地位にのぼることはなかった。

一四五四年(享徳三) 鎌倉公方足利成氏は、関東管領上杉憲忠を殺害して上杉方と全面的に対立し、享徳の乱が引き起こされた。翌年、成氏の軍と上杉の軍は分倍河原(府中市)で激闘を繰り広げたが、上杉方は劣勢に立たされ、大石憲儀の子房重は上杉方として参戦し戦死した。その房重の子が顕重である。顕重の子定重は、一五二二年(大永元)に滝山城を築城した。定重のあとをうけ家督かどくを継いだのが定久で、大石家最後の当主となった。

定久は一五二七年(大永七)に家督を継いだが、一五三八年(天文七)に北条氏康の三男氏照うじてるを養子として家督を譲って出家し、一五四九年(天文十



武州下原住康重作刀 大石氏の庇護により浄福寺城下(八王子市)で鍛刀した下原鍛冶の一人。康重の「康」は、北条氏康からその名の一字を受けたものといわれる。

平山氏は、のちに多摩川上流域(青梅市周辺)の三田氏の支配下に入ったとされている。三田氏が支配した領域は、居城の勝沼城を中心に、多摩郡北西部の多摩川上流域、入間、高麗両郡、すなわち現在の青梅市、埼玉県飯能市、日高市、狭山市を結ぶ地域であった。

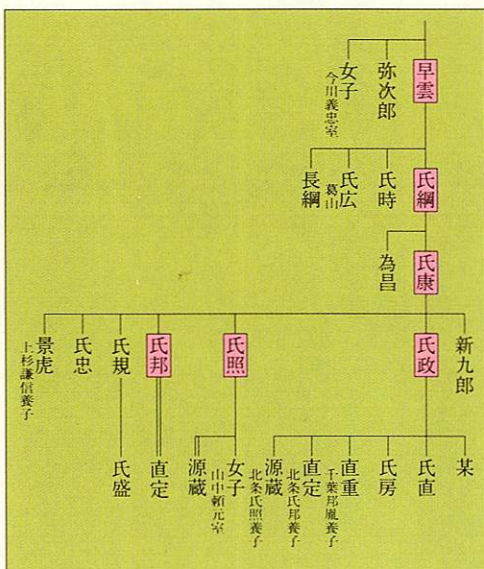
■三田氏が多摩川上流支配

多摩川上流域は、古代から中世にかけて柚保とよばれ、豊かな森林資源に恵まれていた。三田氏は鎌倉幕府に仕えた御家人で、この柚保を支配していた領主である。南北朝の動乱の時期には、鎌倉府に出仕して鎌倉公方足利基氏に仕え、関東管領上杉氏の指揮下に編入された。この当時、三田氏の居館は勝沼(青梅市)にあったといわれ、三田氏の当主は勝沼殿とよばれていた。

戦国時代の三田氏は山内上杉氏に属し、多摩川上流と入間、高麗両郡を支配領域としていたので、これらの地域は総称して三田谷とよばれていた。氏宗とその子政定は文化人としても知られ、連歌師宗祇の高弟柴屋軒宗



山中城の障子堀(復元) (静岡県三島市) 戦国時代末期に小田原北条氏が小田原城の西の守りとして築城。山城の構造で特に重要なのは空堀であるが、堀底に下りた敵が自由に走り回ることを防ぐために敵堀、別名・障子堀というものをつくった。横長に掘った空堀に障子の棧のような障壁を設け、敵兵の移動を妨げたのである。山中城の障子堀は複雑・精巧で空堀技術の完成段階を示すものといわれる。



小田原北条氏略系図

長と親交があったといわれる。
■小田原北条氏の武蔵進出

中世後期の多摩地方は、大石氏、三田氏という二つの在地勢力が割拠していたが、やがて北条氏が制圧していった。北条氏の祖は、斎藤道三と並んで下克上時代を代表するといわれる北条早雲である。北条早雲は、一四九五年(明応四)小田原城を奪うと、関東平野へと触手を伸ばした。この北条氏を鎌倉幕府の北条氏と区別して、小田原北条とも後北条ともよぶ。

北条氏が本格的に多摩地方とかかわりをもつようになったのは、早雲の子氏綱の一五二四年(大永四)の江戸城攻略からである。北条氏の威勢は年を追って強まったが、大石氏も三田氏も当初は友好関係にあった。しかしやがて対立するようになった。三田氏は一五六〇年(永祿三)、関東に出陣した長尾景虎(上杉謙信)を助け北条氏に反抗したため、翌年北条氏照により鎮圧を受けて滅亡した。このとき、一方の大石氏は、一五四六年(天文十五)定久が家督を北条氏照に譲って隠居していた。北条氏は、氏照が大石氏の家督を受け継ぐ形でこの地域に入部してきたのである。